

## 経営史における企業家と革新

粕谷 誠

東京大学教授

### I 経営史における企業家研究の隆盛

企業家研究フォーラムは2002年12月に設立されたが、経営史においては1998年頃から企業家に関する多数の著作が刊行され始めていた。これはバブル経済が崩壊して日本の不況が長引き、山一証券や北海道拓殖銀行が破綻して、閉塞感が日本を覆ったことが影響しているであろうが、シュンペーター（1998）、伊丹ほか編（1998）および宮本（1999）が刊行されたことも研究の起爆剤となったものと考えられる。

経営史におけるその後の企業家研究を牽引したのは、宇田川勝と法政大学イノベーション・マネジメント研究センターおよび佐々木聡である。宇田川は法政大学産業情報センター・宇田川編（1999）をはじめとする企業家関連の著作を公刊してきたが、この仕事は長谷川編（2016）以降、長谷川直哉に引き継がれている。法政大学産業情報センターは1986年に設立されているが、2004年に法政大学イノベーション・マネジメント研究センターと改称され、イノベーションに関する多様な研究をおこなっており、企業家に関する歴史的な研究もその主要なテーマの1つとなっている。また佐々木聡も佐々木編（2001）以降、企業家に関する多数の著作を公刊したり、編集したりしている。これらの研究においては、計量しにくい企業家の「特異性」が注目されており、他人とは異なる革新行動をおこした企業家の特性が注目されている。

これに対して『企業家研究』に掲載された経営史の論文は、きわめて多様である。もちろん個人に注目する研究も多く、石油の出光佐三と山下太郎に着目した橘川（2004）、ハンガリーのアーブラハム・ガンツについて論じた高田（2006）、GEのヤングについて考察した西村（2004）、三井財閥の改革を主導した池田成彬の役割を分析した堀（2016）、陶磁器の企業家である籠橋休兵衛の活動を考察した宮地（2011）、近江商人正野玄三郎を考察した本村（2005）、備後の織物企業家佐々木要右衛門の活動から備後織物史を分析した山崎（2004）および孫正義の事業の発展と資産形成過程を分析した山崎（2007）などがあげられる。しかし企業家の思想に注目したものも

あり、渋沢栄一を考察した田中（2015）、その孫の渋沢敬三を考察した島田（2018）、出光佐三を分析した坪山（2015）があげられる。

さらに経営史のさまざまなテーマに注目した研究もみられる。人的資源管理では、高級船員について分析した三鍋（2012）、神戸高等商業学校生の進路について考察した石堂・高槻・上東（2018）があり、また教育では高等商業学校の徳育について分析した井上・玉井（2020）も発表されている。平野（2008）は戦後の紡績企業の合成繊維に関する技術選択を扱っているし、深見（2007）は岡部広という特定の企業家に注目しつつも、戦前期の生命保険会社のコーポレート・ガバナンスについて考察している。一方、宮地（2005）と谷山（2009）は経営史で多数の研究がある商社について、それぞれ森村組と東洋棉花を対象として分析している。

このほか経営史ではそれほど多く扱われないテーマも取り上げられている。官業については、日本の電話について考察した中島（2007）とドイツの鉄道技術について分析した鳩澤（2011）があるし、都市経営では大阪市の報償契約について考察を加えた山田（2012）があり、さらに市川（2009）はフランスの舟運というインフラについて分析している。これらは広い意味で「公的」なものを考察しており、日本の経営史学ではあまり積極的に扱われていない分野である。

## II ickanan人物を企業家としてきたか

企業家とはickanan人物なのか、まず辞書的意味を確認しておく。英語では *Oxford English Dictionary* によると、“A person who owns and manages a business, bearing the financial risks of the enterprise; (now) spec. a person who sets up a business or businesses, taking on financial risks” とされており、企業を経営するだけでなく、出資して金融リスクを負うことが重視されており、とくに新規企業の設立が強調されている。日本語では、『デジタル大辞泉』によると、「企業をおこしたり、企業の経営に取り組んだりする人。企業者」とされており、『日本国語大辞典』によると、「企業に資本を出し、その企業の経営を担当する人。企業者」とされている。ほぼ英語の意味と同じであるが、後者では出資の意味が明示されているのに対し、前者では企業をおこすと経営に取り組むが並列され、必ずしも出資することは必須ではないとも理解できる。

日本の開業率が低いのは有名で、長引く不況を克服する手段として新規開業をおこなう企業家が待望され、そのメカニズムを理解しようとする企業家学が隆盛するというのが、経済学・経営学での企業家研究の流れであろうが、日本の経営史学においては、こうした理解は一般的ではない。『企業家研究』における歴史に関する論文でも、「起業」にかかわる研究は優勢ではない。それではそれ以外の研究では、どのような人物を企業家としているかをみると、さまざまな人物が企業家として研究の対象となっていることが特徴としてあげられる。まず辞書的な意味に近い「企業をおこした人物」(start-up or founder) とすると、本田宗一郎や松下幸之助が真っ先にあげられ、そうした人物を対象とする研究も多い。

しかし中上川彦次郎など自身が活躍した企業（三井銀行）の持ち分を全くもたない「専門経営

者」が企業家とされることもあり、この場合はシュンペーターを援用して、革新を遂行する人 (innovator) として描かれることが多いといえる。しかしある革新のある企業が成し遂げた場合、それをどこまで特定の個人の役割に帰しうるかは難しい問題であり、組織が大きく、複雑になればなおさらである。シュンペーターも大企業の革新について異なった見方を示したこともある (シュンペーター, 1991, 第12章)。こうしたこともあって経営学では、イノベーション論と企業家論は、前者がイノベーションを個人の役割と切り離して論じ、後者が起業を論じるという形で、ここ数十年の間、「分業」されるようになってきているが、日本の経営史学では両者の結びつきを研究する傾向が強く、これは大きな特色といえる。

以上の2つが日本の経営史学における主要な企業家の使われ方といえるが、これに収まらない例もある。鈴木・小早川・和田 (2009) は、『日本全国諸会社役員録』から役員 (取締役・監査役) の兼任関係のネットワークを考察したものであり、この場合の企業家は、起業とか革新とは関係なく、実業家 (businessperson) に近いといえるだろう。これに近い用法としては、経営史学会 2019 年度全国大会の共通論題のテーマが「慶應義塾出身企業家群像—学閥とキャリアパス—」に設定されていることがあげられる (要旨が『経営史学』第54巻第4号に収録)。

### Ⅲ どのように革新をとらえてきたか

日本の経営史学では、企業家の意味が非常に広く捉えられ、多様な研究がおこなわれているものの、革新に注目する研究が多いといえるが (創業者も革新的企業の創業者が取り上げられることがほとんどである)、どのように革新がとらえられてきたのか、その特徴を考察してみる。革新としてシュンペーターの新結合 (新しい財貨の生産; 新しい生産方法の導入; 新しい販売先の開拓; 原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得; 新しい組織の実現) が援用されることがあるが、ほとんどすべての経営者がこの5つのうちの1つは実行しているであろうから、やはりその程度が問題となる。

また明治維新ののち、西洋的制度・技術を導入することが旧来の事業運営に対する革新ととらえられることが多い。しかし当時導入されたものは、西洋ではごく当たり前のもので、日本にそれを根付かせるのが大変だったものがほとんどである。これは西洋から日本への長い時間と距離を経た革新の普及と考えることができるだろう。そしていったん日本に定着すると、さらに日本の大都市から地方への普及があったと理解できる。これを担った人物が地方企業家としてとらえられることになる。またこうした西洋化は個々の家業の中にもみられ、その場合は中興の祖として (家業なので起業ではないが) 理解されることになる。

明治初期の西洋からの革新の導入ではすでに特許が切れたものも多かったが、時期が下がるの特許の導入が必要となる。並行する特許も多く、技術選択が企業にとって大きな問題となる。野口遵のカザレー法や東洋レーヨンのナイロンの導入などがこれにあたるといえる。

#### IV 革新とその周辺——経営学との接点を求めて

海外から革新を導入する場合には、それを理解する必要がある、教育が大きな問題となるので、経営史でも技術者とか教育は大きなテーマである。しかし珍しいものを知るには、情報の探索が必要で、その要にある人がゲートキーパーとなる。革新が西洋から日本の大都市さらに地方に普及するときにゲートキーパーの役割をだれがどう果たしたのかという視点からも研究される必要があり、これは企業家ネットワークですでに分析が始まっている。渋沢栄一はそのなかで最も重要な人物であったろう。

起業には情報とともに金融も必要である。日本のスタートアップ企業が初期の金融問題をどのように解決したのかについても、さらなる検討が必要であろう。一般的には親戚・知人から調達したといわれているが、出資なのか融資なのかや、銀行などがどのように関与したのかはよくわかっていない。また日本窒素肥料や浅野の事業に三菱や安田といった財閥が関与しているが、財閥に代表される富裕者の関与という視点から検討される必要があるだろう。

情報と金融に教育機関などの支援組織が組み合わさるとエコシステムとなる。渋沢は会社制度・ネットワーク・西洋技術を理解する技術者を組み合わせて多くの会社を興したが、一つのエコシステムをなしていたといえるかもしれない。システムの総合的な理解も必要であろう。

##### 参考文献

- 石堂詩乃・高槻泰郎・上東貴志 (2018) 「「丁稚」か「Salary man」か—神戸高等商業学校卒業生のキャリア選択—」『企業家研究』第15号, 25-41頁。
- 伊丹敬之・加護野忠男・宮本又郎・米倉誠一郎編 (1998) 『ケースブック 日本企業の経営行動 4 企業家の群像と時代の息吹き』有斐閣。
- 市川文彦 (2009) 「近代フランス地域企業家群と輸送体系再組織化策—舟運 = 鉄道連係への新機軸—」『企業家研究』第6号, 36-54頁。
- 井上真由美・玉井芳郎 (2020) 「官立高等商業学校における徳育」『企業家研究』第17号, 25-46頁。
- 橘川武郎 (2004) 「エンリコ・マッティと出光佐三, 山下太郎—戦後石油産業の日伊比較—」『企業家研究』第1号, 1-17頁。
- 佐々木聡編 (2001) 『日本の企業家群像』丸善。
- 島田昌和 (2018) 「渋沢敬三の社会経済思想—実業史博物館構想に見る経済史・経営史の方法—」『企業家研究』第15号, 43-59頁。
- シュンペーター, ヨーゼフ A. (1991) 『資本主義, 社会主義, 民主主義』(中山伊知郎・東畑精一訳) 東洋経済新報社。
- シュンペーター, ヨーゼフ A. (1998) 『企業家とは何か』(清成忠男編訳) 東洋経済新報社。
- 鈴木恒夫・小早川洋一・和田一夫 (2009) 『企業家ネットワークの形成と展開—データベースからみた近代日本の地域経済—』名古屋大学出版会。

- 高田茂臣（2006）「19世紀ハンガリーにおける革新的企業家活動ーガンツ鑄鉄・機械工場の創業と発展の事例に則してー」『企業家研究』第3号，1-16頁。
- 田中一弘（2016）「渋沢栄一の道徳経済合一説」『企業家研究』第12号，35-42頁。
- 谷山英祐（2009）「1920年代インド棉花市場における制度変化と企業行動ー東洋棉花の奥地直買活動を事例としてー」『企業家研究』第6号，18-35頁。
- 坪山雄樹（2015）「出光佐三の合理性と人間理解」『企業家研究』第12号，27-34頁。
- 中島裕喜（2007）「戦前期日本の電話事業における技術問題ー自動交換機の研究開発を中心にー」『企業家研究』第4号，1-19頁。
- 西村成弘（2004）「オーウェン・D・ヤングの企業家活動ービジネスと政府の関係における革新ー」『企業家研究』第1号，62-78頁。
- 長谷川直哉編（2016）『企業家活動でたどるサステイナブル経営史ーCSR経営の先駆者に学ぶー』文真堂。
- 鳩澤歩（2011）「19世紀ドイツ・プロイセンにおける鉄道技術者の挫折ーベルリン・フランクフルト鉄道建設におけるC.F.ツィムペルー」『企業家研究』第8号，1-20頁。
- 平野恭平（2008）「合成繊維事業への後発進出をめぐる技術選択と企業家の決断ー1960年代の呉羽紡績のナイロン進出を中心としてー」『企業家研究』第5号，1-22頁。
- 深見泰孝（2007）「明治期の生保株買い占めとガバナンスー大阪生命事件を中心としてー」『企業家研究』第4号，20-38頁。
- 法政大学産業情報センター・宇田川勝編（1999）『ケースブック日本の企業家活動』有斐閣。
- 堀峰生（2016）「池田成彬の経営観と三井「改革」」『企業家研究』第13号，1-17頁。
- 三鍋太郎（2012）「戦間期日本における高級船員の退職実態ー大阪商船海技員の事例ー」『企業家研究』第9号，36-48頁。
- 宮地英敏（2005）「明治期日本における「専門商社」の活躍ー森村組を事例としてー」『企業家研究』第2号，31-48頁。
- 宮地英敏（2011）「近代日本の中小陶磁器業における企業家活動ー籠橋休兵衛家を事例としてー」『企業家研究』第8号，34-44頁。
- 宮本又郎（1999）『企業家たちの挑戦』中央公論新社。
- 本村希代（2005）「明治期における近江商人の企業家活動ー正野玄三郎家の事例ー」『企業家研究』第2号，17-30頁。
- 山崎広明（2004）「備後織物業史研究ー佐々木要右衛門家事業の展開ー」『企業家研究』第1号，30-46頁。
- 山崎広明（2007）「孫正義（ソフトバンク）の企業家活動」『企業家活動』第4号，96-108頁。
- 山田廣則（2012）「都市経営思想による報償契約の成立」『企業家研究』第9号，12-25頁。

